第８５回愛知学院大学モーニングセミナー

「伊勢神宮式年遷宮を学ぶ！」
～遷宮に秘められた意味は何か～

伊勢神宮　神宮司庁

吉川　竜実

2013年4月9日

1　式年遷宮とは？

20年に1度、宮地（みやどころ）を改め（東と西の御敷地を交互に使う）、古例のままに社殿や神宝をはじめすべてを新しくして、大神（おおみかみ）に新宮（にいみや）にお遷りいただく伊勢神宮最大の厳儀、およそ8年の歳月を費やし33の諸祭行事より構成される。

『延喜式』巻４「伊勢大神宮」

（延長5年・927成立）

凡(およ)そ大神宮(おおみかみのみや)は二十年(はたとせ)に一度(ひとたび)、正殿(しょうでん)・宝殿(ほうでん)および外幣殿(とのみてぐらどの)を造り替えよ〈度会宮(わたらいのみや)および別宮・余社の神殿を造る年限もこれに准(なずら)えよ〉。皆新材を採りて構え造れ。自外(じよ)の諸院は新旧通用し〈宮地(みやどころ)は二処を定め置き、限に至らば更(こもごも)遷(うつ)せ〉、その旧宮の神宝は、新殿に遷し収めよ。

2　式年遷宮のはじまりと持続

『古事記』（和銅5年・712）や『日本書紀』（養老4年・720）の編纂を企画された第40代天武（てんむ）天皇が発意され、第41代持統（じとう）天皇の4年（690）に内宮、同6年（692）に外宮ではじめて実施された。

以来室町期に一時中断された時期もあったが、ほぼ20年に1度、1300年にわたって繰り返し実施されてきている。

『延喜式』巻3「臨時祭」

凡そ諸国の神社は破るに随(したが)いて修理せよ。ただし摂津国の住吉、下総国の香取、常陸国の鹿島等の神社の正殿は、二十年に一度改め造れ。その料は便(たより)に神税を用いよ。もし神税なくば、すなわち正税を充てよ。

式年遷宮は住吉神社や香取神宮・鹿島神宮等のいわゆる官社にも存したので、伊勢神宮特有の祭儀ではなかった。しかしそれらの官社では鎌倉期には経済的な事由によって、既に式年遷宮は廃絶を余儀なくされ、伊勢神宮だけが現在まで営々と持続されているところに大きな意味がある。

4　生命ある聖地

アンドレ・シュラキ（イスラエルの聖書研究家）

　世界の聖地といわれるところへはたくさん行った。その中で私が感動した神殿は五つ。エルサレムの神殿跡、ペルーの山中にあるマチュ・ピチュの神殿、ギリシャのデルフォイの神殿。だが、それらは観光客で賑わっているが、廃墟だったり、祈りが捧げられてはいても昔の神殿そのものではない。北京の紫禁城も美しいが博物館になっている。だが、伊勢神宮は生きている。

アントニオ・レイモンド（アメリカの建築家）

神宮の社殿は世界で一番古くて新しい

式年遷宮という世界に比類のない優れた制度が神宮を生命（いのち）ある聖地として存在し続けることを可能ならしめているかもしれない。

5　式年の問題
（なぜ二十年に一度なのか？）

式年遷宮の「式年」とは定められた年という意味である。伊勢神宮においては、古代から中世にかけては「二十年（内）に一度」を式年とし、近世に至ってからは「二十年ごとに一度」を式年とするようになった。なぜ二十年かという定説や通説は今のところ見当たらない。

①　社殿尊厳保持説
伊勢の神宮の社殿は桧の素木造りで礎石を持たない掘立柱様式を採用、屋根も萱葺きであるため、常に清楚で尊厳のある姿を保つためには、20年を限度として建て替える必要があったとする説

②　世代技術伝承説
社殿の造営にあたる宮大工や神宝の調製にあたる工匠等の伝統技する説

③　朔旦冬至(さくたんとうじ)説
旧暦に基づく暮らしにおいて、20年（正確には19年7ケ月）に一度、11月1日と冬至とが重なる日が廻り来ると、これを「朔旦冬至」といってよく祝宴を催すことが行われた。この日には原点回帰の思想がこめられているので式年の根拠となったとする説

④　時代生命更新説

社会的にも個々の人生からも20年を一区切りとして、新しい転換期が訪れるとする歴史観や人生観より、その節目に大神の更なるご神徳の発揮を仰いで、国家・社会・国民すべての生命の更新と連続とを祈ったのであるとする説

⑤　整数説

2・4・8を吉数と見て、もとの2を聖数と考えその10倍の20を満数として（人の手足の指の本数を合わせた数とも）、この満数と式年とがちょうど符合しているとする説

⑥　歴代在位年数説

古代天皇の在位平均年数が約20年であり、在位期間に一度遷宮を斎行したのが、後に20年に一度を式年とするようになったとする説

⑦　糒貯蔵年限(ほしいちょぞうねんげん)説

古代国家経済の基盤を支えた稲の貯蔵年限を定めた「糒（乾した飯）は廿年を支よ」という「倉庫令」の条文に基づいて、20年を式年として、伊勢神宮はじめ住吉神社や香取神宮・鹿島神宮等のいわゆる官社の多くが実施してきた、20年に一度の造替遷宮の根拠とする説

6　遷宮の問題
（なぜ宮を遷すのか？）

式年遷宮の「遷宮」とは宮を遷すということを意味しており、伊勢神宮においては、東西の御敷地を使用して交互に遷座することを指す。なぜ宮を遷すのかについてはこれも式年の問題と同じく今も定説や通説は存しない。

遷宮に関する3説について

① 大神嘗祭説

天武天皇が毎年の新嘗祭(にいなめさい)のほかに、はじめて一代一度の大嘗祭を制定され、御親(おんみず)から大嘗宮(だいじょうきゅう)（悠紀殿(ゆきでん)と主基殿(すきでん)からなる）において大嘗祭を斎行された。この構想に基づき、皇祖・天照大神に対しても毎年の神嘗祭のほかに、20年に一度新しく宮を造営して、盛大な宮遷りを伴う大神嘗祭を祭斎行するようになったとする説

② 歴代遷宮説（≒一代一宮説）

古来は天皇の御代がかわるたびに新しい宮が設けられ、宮遷りが行われていた。これを「歴代遷宮」という。天武天皇のご発意によって持統天皇の御代に、恒久的な都城制を持つ藤原京が造営されてからは、中央では歴代遷宮は終焉をつげたが、伊勢では20年一度の式年遷宮がはじめられたことから、歴代遷宮の意味が伊勢の神宮に継承されたとする説

③ 伊勢鎮座再演説

はるか2000年前の垂仁天皇の御代に斎行された倭姫命（やまとひめのみこと）による天照大神の伊勢鎮座という「神宮の始原」を、時代を超えて20年周期で繰り返し再演するとの説